レポート

創元会富山支部を支えた『４人のリーダー』

調査研究係　前　知津子

今回のレポートでは、富山県洋画界の先覚者であり、創元展には昭和十六年の第一回展から出品された富山支部の生みの親、そして育ての親である川辺外治先生、その両翼として創元会一途に指導してくださった藤井宏先生と黒田信一先生、また現在名誉会員として支部を引率してくださる山岸忠彦先生の四人の作品とそのプロフィールをご紹介したい。

（本文中一部敬称は略させていただきます）

川辺外治先生＝明治三四年（一九〇一）砺波市の農家の二男として生まれる。五歳の時日露戦争勝利の絵を板戸に唾で描き褒められた。また東野尻小学校在学中にヒョウタンの絵を校長先生に褒められたと記してある。この頃一時は画家を志すも長兄の死により農業を継ぎ、その傍ら教師として多くの画家を育てた。

大正九年に富山県立師範学校を卒業。福野小学校に勤務する。昭和三年、太平洋美術学校に入学し、曾宮一念に師事。文部省検定試験西洋画に合格。この頃は、光風会展、太平洋会展などに出品した。

昭和十六年、第一回創元展に「哺食の子供」を出品する。同年、第４回文展に「忙中の食事」(図版１)を出品する。その作品が三井コレクション買い上げとなった。当時のことを画集の中の随想記に次のように述べている。

―【「忙中の食事」を三井コレクションが買い上げたいから値段を知らせてほしいとのことであった。作品を売ったことがないので、うれしいけれど、どれ程の価格にすればよいか戸惑った。ちょうど東京の友人が絵の普通の値段は一号十円だといっていたことを思い出し、五十号だから五百円でいかがでしょうと返事をしたらすぐ送金されてきた。おかげで娘の嫁入り支度に助かった。】―

図版１　「忙中の食事」第４回文展
91.0×116.7cm　　(昭和 16 年)

またこれを記念し、東一雄らと一沓会を結成した。昭和一八年に「弓の女学生」を第六回文展に、また「藁仕事の母子」（図版２）を創元展に出品した。

図版２　「藁仕事の母子」第３回創元展(昭和 18 年)
80.3×100.0cm

戦時中は学徒動員のため制作を中断するも、近隣の町に疎開してきた版画家の棟方志功や織田一磨、伊藤四郎などの生活を支援し、発表会・研修会を企画、開催し交流を深めた。

昭和三十三年ジャンルを超えた県内作家の創作グループ彩彫会を結成した。彩彫会は昭和六三年まで続く。随想記より　―【戦後拙宅のアトリエに集まった板橋、藤井、清原、岩城、黒田氏らによって砺波フューザン会が生まれ、公開展を催すと同時に、林清納君ら同級生の五人展及び高岡河童会、日曹チャーチル会、それに創元会富山支部員も合流して彩彫会が生ま

れた。】―

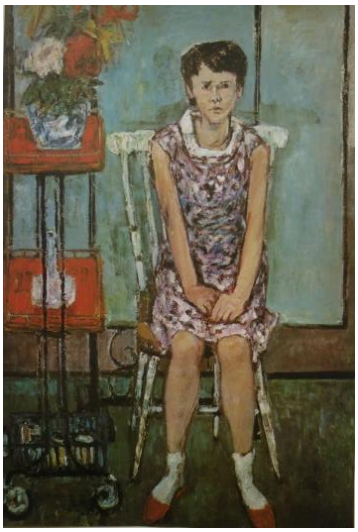
この会は県内在住の画家や彫刻家が所属会派を超えて集い、戦後の県内美術の時代をリードした。現在も多くの美術家が活躍している。

昭和二十八年、教員をしていた頃の老人の小使いさんに会う。随想記より ―【私は老人が好きである。…中略 小品の肖像画を描いて差し上げたいと思いスケッチした。ところがその顔の中に刻み込まれた年輪の苦労とその美しさは、私には立派なモデルであった。どうかこれを機に私のモデルさんになっていただきたいとお願いして、それから毎年の日展出品作の画材となった。】―（図版３）。

昭和三五年に創元会富山支部を創設する（創設時会員 藤井宏・黒田信一・林清納他）。

昭和四一年「正子さん」昭和四二年「花と少女」（図版４）など、家族への愛を描いて日展に出品されている。

図版３ 「養鶏の老人」第12回日展
130.3×97.0cm （昭和31年）



図版４ 「花と少女」第10回新日展
145.5×97.0cm （昭和42年）

昭和四十六年に創元会三十周年記念富山展が開催された。

支部にとっては初めての巡回展で鈴木千久馬先生もご来高下さって盛会であった。

昭和四十七年には富山県文化功労賞を受賞された。また昭和五十三年に勲五等瑞宝章を受章する。

自身の画業研鑽をたゆまず積み、若者を愛し、生徒の良い面を掘り起し、育てることに尽力され、県洋画界の重鎮であった。

昭和五十八年逝去。

藤井宏先生＝大正十年（一九二一）砺波市中野に生まれる。東京美術学校（現東京芸大絵画部油絵画専攻）に入学したが、昭和十五年、十六年に、相次いで両親を失い中退し帰郷。教員として、故郷の中学校で美術を教え、定年まで勤務する。戦後間もなく川辺先生のアトリエで石膏デッサンを学ぶため、週末ごとに通った。後に芸術員会員となる光風会の清原啓一先生とはいつも一緒であった。その頃から創元展と日展に出品し始め、昭和三十年第十一回日展に初入選を果たし（図版５）、以後十二回連続入選する。そのあとは不出品であった。昭和三四年に創元会会員に推挙され、昭和五十五年の第三十九回展に文部大臣奨励賞を受賞する。（図版６）。

図版５ 「楚風翁」
135.0×93.5cm

図版６「母子」第39回創元展文部大臣奨励賞
145.5×112.5cm

平成四年には理事に就任する。妥協を許さない制作姿勢を貫き、その都会的な洒脱な人物表現は注目を集め日展でも特選候補になったとお聞きしている（図版７）。彩彫会を結成した仲間の一人でもある。

図版７　「カギッ子」
135.0×93.5cm　（昭和 48 年）

図版８　「老残筆を捨てず」
162.0×112.0cm

元来好奇心も強く、書にも優れ、宴席でも色紙に絵と文をかいて喜ばれた。晩年は目が悪く、入退院を繰り返しながらも最後まで制作に励んだ。「老残筆を捨てず」（図版８）は自身の心魂であろうか。

平成二十四年逝去

黒田信一先生　Ⅱ　大正七年（一九一八）砺波市の油田で絵や音楽の好きな両親の長男として生まれた。富山県立高岡中学（現高岡高校）を昭和十一年に卒業。昭和十四年に富山県立師範学校本科に入学した。同校で曽根末次郎に油絵の教えを受けた昭和十六年に卒業し、小学校に勤務するも、同十七年に陸軍に召集されソ満国境の警備にあたった、終戦を迎え樺太に移動、色丹島にて過酷な抑留生活を送る。昭和二三年に復員小学校に復職する。昭和二五年県展会場で川辺先生と出あったのがきっかけで指導を受ける。画集の中で川辺先生との出会いを次のように述べている。【両親とも絵や音楽が好きで、その頃母と二人で、富山、金沢、高岡と展覧会を見に行くことが多かった。そんなとき県展の会場で偶然川辺先生と出会い、絵を見ていただく最初の機会となったのです。母は先生より５つ師範の先輩で、先生のことはよく存じ上げていたことから、急速に親しくさせていただくことができました。それから四十年、ことに昭和三七年、三八年と続いて両親を亡くしてからは先生の純粋な人間愛に支えられながらここまでたどり着きました。　後略　】初期には音楽に観覧した作品が多くあるのは、両親の影響であろうか。

昭和二八年第十二回創元展で「裸婦」が初入選。また昭和三十一年第十回記念日展で、「長椅子の少女」（図版９）が初入選、以後も娘さんをモデルに制作入選を重ねた（図版 10）。

図版９「長椅子の少女」第１回新日展
130.3×97.0cm　（昭和 33 年）

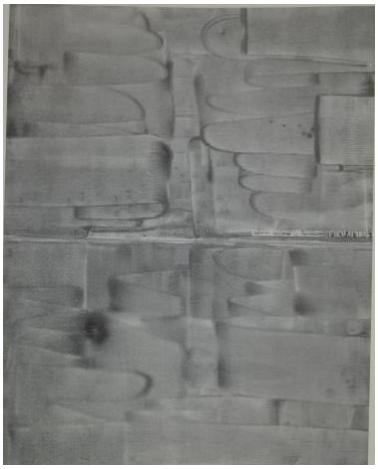
（このころは川辺先生、藤井先生、黒田先生と創元会からそろって入選されていた）その後作風が抽象的となり、日展には不出品となった

図版 11「赤い靴」　第 38 回創元展会員賞
145.5×112.0cm

が、創元展には最後まで出品された。第三十八回創元展ではその色感、描線が素晴らしく会員賞となった（図版 11）。その後具象表現から、抒情性を加味した半具象へと変化していく。黒田先生の抽象画は、渋くどことなく深見のある色彩の空間、至る所に澱みを作る筆触、拭き取った跡、引っ掻いた線、まさにキャンバス上の格闘である（図版 12）。普段は温厚な先生のどこからあのファイトが生まれたのであろうか。創元展には平成二十一年の第六十八回まで続けて出品された。

平成二十六年逝去。

図版 10　「ピアノを弾く少女」第 3 回日展
162.0×97.0cm　（昭和 35 年）



図版 12　「INTERFACE」
第 47 回創元展
145.5×112.0cm　（昭和 63 年）

山岸忠彦先生（現名誉会員）＝　昭和四年（一九二九）長野県飯田市の菱田春草の生家近くに生まれ、幼時から父に春草の話を聞いて育った。

小学一年の時，戦艦『長門』の絵を黒板いっぱいに描き、先生に叱られるのではないかと思っていたら、「誰だこの絵を描いたのは！」「上手いぞ！」とたいへん褒められたという。昭和二十二年長野県飯田中学（現飯田高校）を卒業、日本曹達田原工場（愛知県）に就職。翌年高岡工場に転勤、研究室勤務となる。昭和二十八年研究勤務に没頭し健康を害し療養生活が続く。昭和三十年に職場に復帰する。そしてこの頃、職場に絵画サークルを作ろうとの声が起きた。昭和三二年当時高岡工芸高校の講師であった川辺外治先生を迎え、日曹チャーチル会を結成する。これが川辺先生との出会い、そして絵画の道の第一歩である。その後川辺先生のアトリエにも時々通った。勤労画家の名で県主催の各展で最高賞を受賞する。全国県展選抜展（第五回、第六回）に連続出品している。（図版１３）

（この時の中央審査員は福沢一郎であった。）

第十九回創元展に初入選、以後出品を続け、第二十六回展で創元会次賞、二十七回展で準会員賞を受賞し会員推挙となった第三十六回創元展で会員新人賞、中野賞を受賞。昭和五十五年、第二十三回安井賞展に入選する。（図版１４）

第四十二回創元展で文部大臣奨励賞を受賞する。

図版 13　「卓上静物」県展
F50　（昭和 41 年）

図版 14　「ランプのある静物」第 8 回日展
F100　（昭和 51 年）

その後彫刻をテーマに心象表現を続ける。山岸の画風は静物画が本領でモデルの各々が響きあい、助け合って調和し自分自身の世界を表現

している。日展では昭和四十三年「卓上静物」が初入選する。その後も出品を続け、第八回日展（改組）に再入選する。（図版１５）この頃の作品は擬人的な燭台が主役の連作である。八十歳を過ぎた今も家族愛をテーマに出品を続け、厚塗りを削り、重厚な質感と渋い色彩で作品を完成させている。気力も体力も劣らない。隔年開催される日展富山巡回展においてはユニークな解説で会場を盛り上げ定評があり、ファンも多い。

早くからアトリエを開放し研鑽の場、そして語らいの場とした。支部総会においては必ず私製の賞状を作成し、支部員一人一人に手渡し元気づけ、意欲を高める。またたいへんな筆まめであり、届けられるお便りやファックスからも温厚な人柄がにじみ出ている。平成七年に理事就任。平成二十一年には名誉会員となる。

図版 15　「卓上静物」安井賞展
F100　（昭和 55 年）

晩年も秋の研究会には欠かさず参加し，熱心に指導を受ける姿は私達後輩にとって、大きな刺激である。

今日もまたアトリエで生徒とともに制作に励んでいることであろう。

図版 16　「ブロンズ像のある景」第 73 回創元展
F130　（平成 26 年）

今回の考察では４人の先生方の、作品集をじっくりと拝読させていただく貴重な機会となりました。諸先生方の画業に対する研鑽と熱意、そして人間愛溢れるお人柄が、創元会富山支部を支えてくださった気がします。さらに富山支部は今回ご紹介した四人の先生のほかにも、林清納先生、浜地茂信先生など、まだまだ紹介したい先生や事柄もありますが、次の機会に違った視点から述べたいと思います。

最後になりますが、レポート考察に当たっては、名誉会員の山岸忠彦先生の助言とご指導をいただきながら、作成しました。

心からお礼を述べ、感謝申し上げます。

参考文献

川辺外治作品集（昭和四十九年発刊）・黒田信一作品集（平成三年発刊）・藤井宏作品集（平成二十五年発刊）
山岸忠彦画集（平成七年発刊）